

# 「歴史家体験活動」で主体的な学びをより深めよう

愛知教育大学 教授 土屋武志

## 1 学習指導要領の主語が変わった

中学校の場合、学習指導要領の文末は、これまでは「理解させる」「身に付けさせる」のように表現されてきた。それが今回の改訂で、「理解すること」「身に付けること」となった。従来は主語が「教師」で生徒に「させる」という表現であったのに対して、主語が「生徒」に変わり、生徒が「する」という表現に変わったのである。したがって、新学習指導要領に書かれている内容は、生徒みずからが主体的に学ぶものとして表現されている。これは歴史的大変化である。中学校社会科歴史的分野でも、「○○などに着目して、○○を多面的・多角的に考察し、表現すること」というように、生徒がすべき具体的な学習活動が示されている。

## 2 主体的な学びとしての「歴史家体験活動」

では、歴史を生徒みずからが主体的に学ぶ方法とは、どのようなものだろうか。それがいわゆる「歴史家体験活動」である。歴史家は、情報を覚えるのではなく、選び、組み立てて過去を叙述している。つまり、過去を多面的・多角的に考察し、表現している。そのときに、過去の情報として残された記録（資料）を用いる。

中学生は、残された過去の記録そのものに接することは難しいが、教科書や資料集に掲載されている資料を使って歴史を叙述することで、擬似的に歴史家となることができる。それが歴

史家体験活動である。もちろん、博物館や文書館に出かけて、直接過去の情報に接するとなお良い。少なくとも、教科書は歴史家体験活動のためのものでなければならないし、現行の教科書も、使い方によって歴史家体験活動のツールとなる。では、どのような使い方だろうか。その基本は、問いをもち、その問いにかかわりそのような情報を選択し、集めることである。そしてその情報から仮説を立て、さらに情報を集めていく。その過程で、仮説に反する情報を無視することなく、それさえもふまえた説として自身の考えをしっかりと組み立てなければならない。

この活動は問いから始まるので、問いは最も重要な要素といえる。では、その問いはどのように立てるのだろうか。

## 3 歴史家体験活動での問い

生徒たちが、最初から適切な問いを立てることができるとは限らない。だから、教師が問いを出し、その問いから、生徒たちがより深い学びに向かうこともある。

愛知教育大学で教授を務めた有田和正の出島の授業を紹介しよう。有田が筑波大学附属小学校教諭のときの実践である。授業は児童が自分で調べてきたことの発表で始まり、教科書にある「鎖国」に関する学習内容を、児童の発言をもとに有田が板書していく。その途中で、有田は黒板に掲示した出島のイラストを見て、「出島には建物が何棟ありますか？」とたずねた。

図1 『社会科 中学生の歴史』 p.108 「①出島」  
(川原慶賀『長崎港図』神戸市立博物館所蔵、  
Photo:Kobe City Museum/DNPartcom)  
【覚えるための資料から考えるための情報を見つける資料へ】  
「出島には、オランダ人は何人住んでいたか？」

児童はそれぞれいろいろとつぶやいたが、有田は続けて、「約40棟あります。貿易をしていたわけだから倉庫がたくさんあったけれど、その倉庫には、いったい何が収められていたでしょうか」と発問した。「ギヤマン」「望遠鏡」「ビードロ」などの児童の発言を板書しつつ、有田は大きな「？」マークを板書して、「当時の最大の輸入品が何か、わからないね」と確認した。続けて有田は、出島の絵のなかにえがかれている牛や花畑についてもたずね、「なぜ牛を飼っていたのか」「チューリップはあったか」と問いかけ、それにも小さな「？」マークをつけて板書した。さらに、「出島にオランダ人はいったい何人住んでいたでしょうか？」と問いかけた。これらの問いは、一見豆知識を聞いているように見える。しかし、これから述べるように、深い歴史理解につながる重要な問いなのである。

出島の倉庫にあった輸入品は、アジアからの砂糖と生糸である。望遠鏡などヨーロッパの科学の産物もあったが、アジアの産物が最大の輸入品だったことは、そのあとの学習につながる重要な情報である。なぜなら、明治時代の学習では、富岡製糸場などで生糸が製品化されて輸出品となることを学ぶからである。つまり、明治の「文明開化」を理解するためには、明治

より前の時代は、生糸が輸出品でなく輸入品だったことが理解されていなければならない。歴史の大きな変化を理解させるためには、情報を時代の前後で比較する活動が必要なのである。

このように考えると、牛を飼っていた理由を問うことは、当時の日本には牧畜がなかったことに気づかせ、そのあと文明開化の象徴として人々が「牛鍋」を食べるようになったという変化を理解させるための伏線となる重要な問いなのである。同じことが出島の人口についてもいえる。出島には、春から秋の繁忙期には、1000名をこえるオランダ人（東南アジアやアフリカ出身の奴隷もふくむ）がいた。当時、オランダ東インド会社は、ジャガタラ（現在のインドネシアのジャカルタ）に根拠地があり、春から夏にかけて南からの季節風に乗って長崎に来港し、秋に北からの季節風が吹き始めると南に帰っていった。だから、出島の人口は正月あたりに、30～40人と一年で最も少なくなるのだった。したがって、出島には何人住んでいたかという問いは、季節によって違うという答えを導く。季節に関係なく一年中貿易できるようになるのは、帆船にかわって蒸気船が一般に用いられるようになった明治時代からであった。

このように、歴史学習は、学習者が時代の変化に気づいて自分の言葉で説明できるように、教師が意図的に伏線をはって、のちに変化に気づかせるように問いかける場面も必要になる。これは、有田実践に見られる問いの大きな特徴であるが、歴史家体験活動の問いの基本でもある。この点を計画的に実践すると、次第に生徒自身で時代を比較した問いを立てられるようになる。そのためにも、教師は、少なくともその時代で教えることが前の時代と同じか、それとも異なるかという、歴史学習ならではの比較が入った授業を意識したい。

## 4 思考を深める

前項で、歴史学習では、ある時代で学習させたいことがある場合、それを理解させるために必要な情報を、その前の時代の学習内容として意図的に学習させることが必要であることを述べた。しかし、そのように伏線を張っていたとしても、生徒が自身で考えを深めようとするとき、最初から深い考えに達することは難しい。ゆえに、いくつかのステップが必要になる。

「最悪の恐怖一どのようにすればペストに関する良い物語をつくれるか?」という、中世ヨーロッパの伝染病(ペスト)に関する単元を扱ったイギリスの事例がある。教科書にある情報をもとに、中世の村で起きたペスト流行の物語を生徒自身が書くというものである。この活動は、順に示される4つの活動課題に沿って進められるが、そのなかで最も注目すべきは最終課題である。それは、生徒が書いた「ペストの物語」を、自身に校正させる課題である。

### 課題

あなたの歴史物語のできばえはhowですか。もちろん、完成ですね。しかし、本当に良い歴史物語にしたいのなら、ペストについて多くの「事実」にもとづかなければなりません。

- 1) あなたの物語のうち、「ペストの恐ろしさ」を「事実」にもとづいて書いている部分に、赤でアンダーラインを引いてください。
- 2) 「中世の人々がペストについてどのように考えていたか」を「事実」にもとづいて書いている部分に、緑でアンダーラインを引いてください。
- 3) 「ペストが農民に及ぼした影響」を「事実」にもとづいて書いている部分に、黒でアンダーラインを引いてください。例えば、ウィリアム・ブリュワーは自由になりましたか。彼は領主の支配からぬけ出すことができましたか。

3色のうち、アンダーラインをあまり引いていない色に気づくでしょう。あなたの歴史物語をより良くするためにどこを直すと良いかわかりますね。

この課題は、「歴史事実」「その時代の人々の常識(考え方)」「その歴史的なできごとの影響」という3つの要素(視点)をふくんだ叙述がなされているかを、生徒自身に校正させている。単に文章を書くのではなく、上記の3つの観点から「歴史をえがく」ことができるようにする活動となっている。さらに、「あなたの歴史物語をより良くするためにどこを直すと良いかわかりますね」という指示には、未完成の物語を生徒が自身で改善することがこの授業における学習であり、教師は、活動の節目で改善の機会と視点(足場)を生徒たちに与え、彼らの学習を支援する役割に徹することが示されている。

歴史家体験活動というアクティブな歴史学習は、生徒たち自身が歴史を考え、えがき、教師は学習活動に取り組む生徒を支え、思考を深める良きコーチ役なのである。

## 5 変わる入学試験

現在の中学生在が大学受験をするときには、大学入試センター試験にかわって大学入学共通テストが実施されている(2021年1月から)。学習指導要領の改訂に即して、思考力を重視した問題が出題される。例えば、「次の2つの説のうちどちらを支持するか?また、その説の根拠として合うものはどれか?」「次の2つの資料の間の時代に該当する資料はどれか?」「次の資料に述べられた歴史をまとめた模式図として適切なものはどれか?」など、歴史用語を知っていれば解答できるような単純な問題ではなく、その用語の概念的な意味が理解されているかが重視される傾向にある。つまり、知識とは用語を用いて説明することができてはじめて、それが身につけていると評価されることになる。

また、少子化にともなって、大学への進学方法も多様化し、推薦やAO型の入試も増加する。歴史学習の評価問題も大きく変化するだろう。



図2 『社会科 中学生の歴史』 p.114～115「タイムトラベル⑦ 江戸時代をながめてみよう」(上)  
p.236～237「タイムトラベル⑩ 高度経済成長期をながめてみよう」(下) イラスト：香川元太郎  
【比較し、発見し、説明してみる】

生徒はいろいろな違いを発見できる。江戸時代は徒歩でおよそ1日10里(約40km)移動した。開業当時の東海道新幹線の速度は時速210km。江戸時代の人が1日かけて歩いた距離をわずか11分で走った。現在はさらにスピードアップし、約8分で走る。ところで、どの時代にも白い犬がいることに生徒は気づいているだろうか。

前項にあげたイギリスの学習活動事例のような学習が日本でも一般化してくると思われる。生徒たち自身がタイムトラベルを試みる図2のような資料を活用して、新入試に向けた力を養いたい。

(参考文献等)

1. 土屋武志『解釈型歴史学習のすすめ—対話を重視した社会科歴史』(粹出版社, 2011年)
2. 土屋武志『アジア共通歴史学習の可能性—解釈型歴史学習の史的探究』(粹出版社, 2013年)
3. 『ビデオでつかむ“プロの授業技術”5 有田和正「社会科歴史・出島」の授業』(明治図書出版, 2000年)